杉本苑子

絵島疑獄

(上)

絵島疑獄（上）

杉本苑子

毎日新聞社

絵島疑獄（上）
定価 一、一〇〇円

昭和五十八年五月五日 第一刷
昭和五十八年六月十日 第二刷

著者 杉本苑子
編集人 川合多喜夫
発行人 関根望
発行所 毎日新聞社
〒100 東京都千代田区一ッ橋
〒530 大阪市北区堂島
〒802 北九州市小倉北区紺屋町
〒460 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

© SONOKO SUGIMOTO Printed in Japan 1983

絵島疑獄

(上)

目次

山焼け　7
亀の甲府　48
太閤江戸へくだる　89
花冷え　130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

正徳の治　170
柔と剛　211
舟あそび　251

裝幀

川田幹

絵島疑獄

(上)

山焼け

一

奥山百合は、自分の名に愛着を持っていた。養母の絵島がつけてくれた名前だからである。

草花としての百合は、さして好きではない。匂いが強すぎる。甘ったるく、人に媚びるような感じがいやだった。

「そこがいかん。お前のそういう素気ない、女の子らしからぬところがな」

当時まだ、ほんの小娘だった百合を、父の奥山喜内は時おり説教口調でたしなめたものだ。

甘い濃密な香りに、特色があり魅力もあるのが百合の花ではないか。たとえば大輪の山百合などが二、三本、ほの暗い床の間に活けてあるとする。なんの気もなく部屋に踏みこんだ刹那、花の姿に目をとめるより先に、嗅覚を刺激する官能的な快感……。

「化粧の料の残り香か？　それとも今の今まで、ここにあえかな女人でもおったのではないか。――そんな妄想さえ抱かされる香りの悩ましさこそが、百合の花の身上なのに、それを嫌うようではどう

もならん」

というのが、説教の内容である。いかにも女好き、遊び好きな喜内らしい言葉だが、

（甘い香りだけが良い匂いとはかぎらないわ。花にはもっとさわやかな、ゆかしい匂いのものだってたくさんあるのに……）

反撥を、むすッとふくれ面に漲らす百合は、なるほど父が懸念する通り、世間並みな可愛らしさにはいささか欠ける女の子かもしれなかった。

まして継母の口にかかれば、

「陰気で強情で無愛想で……何を考えているのかわからない小憎らしい子」

と、いうことになる。

武家の妻女らしく兼世という名で呼ばれてはいるが、継母はもと、お兼といい、吉原の引手茶屋の女中だった。そこで後添えに迎えるさい、喜内は配下の徒士の一人にたのみこみ、名目だけその者の姉ということにしてもらって兼世を役宅へ入れたのである。

水商売の出にしては、しかし兼世はよく、侍の家のくらしに順応し、やがて千之介という男の子を生んだ。百合には腹ちがいの弟にあたる。

この子が這い歩きしはじめたころ、不幸が襲った。神社の回廊から転落し、足を折ったのだ。兼世に言いつけられて子守りをしていたのは、ようやくそのとき、数え年で六ツになったばかりの百合であった。それまでは格別むつまじくも、不仲でもなかった継母と継子の間柄がいきなり険悪になったのは、千之介の身に災厄が起こってからである。

下手な接骨医にかかったため千之介の右足は変形し、ものに縋らなければ歩行できなくなった。ひと足ごとにガクンと身体が一方にかしぐ。腰がよじれる。曳きずるように右脚を前へ出す姿がいかに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

も痛々しい。

「子守りを嫌って、わざと弟を突き落としたんだろう」

兼世は逆上し、半狂乱になって百合を折檻したし、父親の喜内も、

「一粒種の跡取り息子を、台なしにしおった」

口ぎたなく罵った。

百合は泣きじゃくるばかりだった。親たちに何を言われるより先に、彼女自身、千之介への慚愧に幼い胸を刳られていたのだ。

ほんのわずかな油断であった。兼世が口にしたような悪意など、みじんもない。片コトを喋りはじめた弟が、百合はいとしくてならなかったし、子守りという仕事をけっして忌避してもいなかった。

奥山喜内は水戸家の御徒士頭を勤めている。役宅は小石川の水戸邸内にあり、お築地とは背中合せの近さに、牛天神の森が涼しい木蔭をつくっていた。静かな境内で、百合は千之介を遊ばせ、自分も団栗集めに夢中になった。樫の大木があり、ままごとの材料になる団栗がいくらでも拾える。赤トンボも群れをなして飛んでい、千之介はしきりにほしがったが、つねづね父の喜内から、

「蟬トンボのたぐいを捕ってはならんぞ」

固く言い含められているので、これには手を出さない。生類憐み令に抵触するのだ。

子供ごころに、それでも用心して百合は千之介を、おぶい紐で結えた。その端を勾欄の柱にむすびつけ、遠くへは這って行けないようにしておいたのである。

いつ、紐がほどけたのか知らない。ふくらんだ袂を摑んで、

「千ちゃん、ほら、団栗こんなに拾えたよ」

ふり向いた目に、伸び上って、手すりから半身を乗り出している弟の姿が映った。
「あッ、あぶない」
走ったが、まに合わなかった。回廊から六尺ほど下の地面へ、千之介は尻もちをつく形で落ちたのであった。
「頭を打たなかったのが、せめて不幸中のさいわいだった」
喜内の兄で、小児科の医師をしている奥山交竹院が、なぐさめ顔に言った。
「頭蓋の骨がかたまらぬ幼時に、頭部を強打すると、白痴同様になる恐れがある。そこまでいかずとも、ひどい頭痛や癲癇の発作に生涯、悩まされる例症もあるでな。ものは考えようじゃ。まだしも足で始末がよかったとせねばならん」
五体満足に生まれついた倅を不具者にされた腹立ちは、しかし、なまなかな慰藉ぐらいで収まるはずはなかった。千之介に不憫がかかればかかるほど兼世は百合に当り散らし、もう、そうなると、どこから見ても継子いじめの様相を呈した。
それでなくても口かずが少く、
「おとなしい子」
と言われていた百合が、いよいよ無口な、陰鬱な少女になったとしても無理からぬことかもしれない。
見かねたのだろう、交竹院が、
「引きとって、わしのところで育ててやろう」
助け舟を出してくれた。
百合にとって父方の伯父に当るこの医師は、若いころから医術の腕のたしかさで知られ、現在、大

城の表医師を勤めている。禄高は九百石――。屋敷は神田小川町にあり、百合の住む水戸家のお役宅などより庭も間取りもはるかに広かった。

水戸家といえば、交竹院や喜内の父親――つまり百合の祖父の奥山隠徳院は、これは内科本道を得意とした医師で、水戸中納言光圀卿の侍医をつとめ、法印にまで任ぜられている。とうに物故したけれど、喜内はこの父の縁で水戸家に奉公し、彼なりの才腕を買われて御徒士頭にまで昇進したわけだ。

ともあれ兼世にすれば、百合の顔すら見たくない心境におちいっていたので、

「おねがいします。ね、あなた、そうしてもらってくださいよ」

二つ返事で交竹院の申し出にとびついた。

「かまいませんか兄さん、こんな小さな子供を引き受けて……」

喜内が首をかしげたのは、つい先年、連れ合いに死なれて、交竹院が男やもめの不自由さを喞っていたからである。

ただし、亡くなった妻との間に子は生まれていない。その意味からすれば、百合は伯父の家の跡を継ぐこともできるはずだし、

「奉公人は、女中も下男も大勢おるでな、大丈夫、成人させられるよ」

と交竹院は請け合いもする。

「そうですか。それではひとつ、ご面倒でもおねがいしますかな」

こうして、異母弟に怪我をさせたその年のうちに、百合は父の住居から神田小川町の伯父の屋敷に移らされたのであった。

二

絵島にはじめて会ったのは、その翌年である。場所は交竹院邸の庭だった。

（なんて美しい人だろう）

息を呑む思いで、そっとみつめつづけた日の胸の高鳴りを、百合は忘れることができない。目を洗われる……。形容詞としてだけでなく、実際にそのような感覚があるのをはじめて知った。

このとき絵島は、池の石橋の上に佇んでいた。奥山交竹院の屋敷は、九百石取りの富家にふさわしく数奇を凝らして建てられ、庭には築山、大池まで掘ってある。

菖蒲の花がさかりだった。白と、濃紫……。二色きりなのが、かえってすがすがしく初夏の大気を引き緊めていたが、絵島の立ち姿は百合の網膜に、まるで菖蒲の精さながら鮮烈な印象で灼きついた。

百合、七歳。絵島はこのとき、二十四歳……。紀州家の奥勤めを辞めてまもない宝永元年の、夏のさかりであった。

「おや、そこにいるお子さんは、どなた？」

と、花菖蒲に落としていた眸をあげて、やがて絵島が問いかけてきた。斜め横からの熱い視線に気づいたらしい。

（返事をしなければ……）

焦りながら、舌が攣れて百合はすらすら答えられなかった。

「わかったわ。交竹院先生に診ていただきに来た患者さんね？」

ちがう、ちがいます、わたしは先生の姪の……と、咽喉まで出かかっているのに声にならない。顔ばかりほてらせて、羞んでいる背を、

「何をもじもじしておるのじゃ」

あたたかな、大きな掌で、どんと叩いた者がある。焼き杉の庭下駄を突っかけて交竹院が池のほとりまで出て来たのであった。

「この麗人は白井のお美喜さん。お前の名附け親じゃないか百合」

少女が何を言うより早く、

「あら、これが奥山喜内どのの娘御の、百合さんですか?」

当時まだ、美喜の本名で呼ばれていた絵島が、華やいだ声をあげた。

美少年じみた、きりッと小股の切れ上った美貌だが、笑うと目許に、爽やかな色気が滲む。やはりどう見ても、五月晴れの空に映える花菖蒲に似た女なのであった。

「さよう。この子が弟の娘の百合でござるよ美喜さん。せっかくあなたに、きれいな名前をつけてもらいながら、ごらんの通り名は体を現さぬおヘチャでな、百合は百合でも鬼百合じゃなどと、まわりの者に笑われておりますわ」

交竹院の無遠慮なこきおろしを、

「そんなことはありません」

取りなし顔に絵島は遮った。

「見るからに悧発そうな、子柄のよいお嬢ちゃんですわ。今日は伯父さまのお屋敷へ遊びにでもおいでになったのですか?」

「いや、厄介払い同様、親もとから出されましたのじゃよ」

と、口の重い姪に代って、こんども交竹院が説明した。
「ご承知の通り喜内の先の妻は、百合がまだ、よちよち歩きのころ離縁いたし、兼世という女が後添えの座に納まったのじゃが、その腹に生まれた弟を、子守りを言いつかりながら百合のやつ、ひょいと目を離した隙に牛天神社の回り縁から落として、跛にしてしまいましたのじゃ」
「まあ」
「兼世は怒り狂う、喜内は叱る。すっかりいじけて、痩せてまできたのでな、この家に引き取って伯父のわしが親代りに育てているのでござりますよ」
「かわいそうに……」
石橋のこちら側へ絵島は渡って来、百合の前にいきなりしゃがんで、その薄い両肩に手をかけた。
「だれにも増して、百合さん自身いちばん苦しんだはずですものね。あまり責めては酷ですわ。ね？ご自分がしでかしたあやまちを、百合さんは悔いたでしょ？　弟さんのために心を痛めたでしょ？」
こくッと少女はうなずいた。千之介の苦痛に代りたい、いっそ死んで詫びたいとまで思いつめた事故直後の激情が、みるみるまた、よみがえり、目は涙でいっぱいになった。
「さ、もう泣かないで……。悔いて消えない罪なんて、この世にはないのですよ。まだこんなに幼いのに、あなたは存分に罰せられた。償いはすんだのです。女の子らしく、これからは元気に、もっと明るくすごさなければ……」
絵島は立ちあがり、肩に置いた手をすべらせて百合の片手を取った。築山の亭へ向かって、ゆるやかな小径を登りながら、
「わたしにも腹ちがいの兄がいます。白井平右衛門といいますけど、この兄と交竹院先生とが永年の友人でね。仲のよい碁敵なのですよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.